開催地名：広島県大竹市	
開催日時	令和 4 年 11 月 20 日（日）　13：30　～　15：00
開催場所	大竹市役所
語り部	草　貴子　（宮城県仙台市）
参加者	大竹市地域防災リーダー　31 名
開催経緯	当市の防災における共助活動は、土砂災害や洪水災害に対する減災を最優先事項に位置づけており、相応の対処力が向上しつつある。 一方で当市は、昭和 26 年のルース台風以来、大規模災害に遭遇することなく約 70 年以上の年月を過ごして来たため、大災害や長期の避難所運営の経験がない。このため災害に対して、正常化バイアスが発生しやすいという弱点を抱えている。また、大きな地震や津波を受けた経験がないため、これらに対する判断力に乏しく、将来必ず発生すると考えられる「南海トラフ巨大地震及び津波」に対し、漠然とした不安はあるものの、効果的な対策に至っていないと考えられる。
内容	（１）東日本大震災以前の状況 震災当時、私は宮城県仙台市泉区市名坂に住んでおり、町内会を運営していた。仙台市泉区は 100 万都市仙台の副都心で、人口は 21 万 5 千人である。泉区は内陸部であるため、幸いにして津波の被害は免れた。 市名坂東町内会は、仙台市の泉区東部に平成 20 年設立された。働き盛りの 40 代、50 代の家庭や単身赴任の家庭が多い中で、女性が中心となって立ち上げた組織である。役員 9 名が全員女性であること、集会所設立のために銀行ローンを組んだということは、仙台市初の試みだった。地区の指定避難場所は町内から 2 キロ離れた小学校であるため、平成 22 年に完成した集会所は、最初から緊急時の避難場所として防災上の観点を強く意識し、オール電化の導入や収納の高さを女性の腰に合わせたり、トイレを 2 箇所設置するなどの工夫を凝らした。 （２）震災時の状況と対応 3 月 11 日の午後 2 時 46 分、近所の電気店で買い物中、地震に見舞われた。立っていられないほどの強い揺れがあり、ガラスの割れる音、人の悲鳴、天井が落ちる中、夢中で外に出た。建物も電柱も倒れそうで、車は上下に動いた。 発災後、すぐに避難をした。避難先では避難者の中からリーダーとサブリーダーを決め、町内会はサポートするかたちで運営に入った。リーダーとサブリーダーの指示に従うようにお話をし、「指示に従わない人は出ていって構いません」とお話したところ、出て行ったご夫婦もいた。電気は 2 ～ 3 日、水道は 3 ～ 4 日、ガスは 1 カ月で復旧した。卓上コンロを使って、各自で持ち寄った材料で子どもたちが料理をつくるなど、ほのぼのとした時間も取れた。支援物資の引き取りの支援を受けたのは 12 日と 13 日の 2 日間だけで、その後は各家庭で対応していただいた。非常事態の避難所で、思いがけず優しい言葉をかけてくれる方もいれ

	ば、自分の権利主張だけをする人もいる。外国人の方の食べ物の問題や、宗教的な問題など、普段の生活では気付かないことにも直面し、とてもいい経験ができたと感じている。 （３）震災を通して感じたこと 　町内会では、平成 23 年 11 月から未就学児を持つ若い母子を対象に子育て支援を開始した。平成 24 年 4 月には、町内会として「全国おもちゃ図書館」に申請し、「おもちゃ図書館ずんだっ子」が誕生した。災害時に備えたまちづくりに関しては、毎年 1 回しているお祭りの中で、防災訓練を開催している。煙を炊いての濃煙体験をはじめ、防災減災に関するクイズや消火訓練を実施して、お祭りの収益金の一部を津波遺児に寄付している。 　行事はなるべく卒業式、入学式、転勤、引っ越し、受験の時期を避けるように設定し、月 1 回実施している町内会と役員会も、あくまでも任意で、できることを無理なく行うこととして活動をしている。行政にできることは限られているので、避難所の運営方法等は私たちが考えなければならない。地域防災で大事なことは、自分自身の特性を考えて、オリジナリティのある身の丈に合ったことを実践することだと思う。また、逃げることも避難所のお世話も、防災・減災を考えるにしても、健康な体がなくては何もできない。足腰を鍛えて、元気な体で地域での活動に邁進していっていただきたい。
開催地より	東日本大震災を経験された語り部から、自主防災組織（町内会）の活動内容や避難所運営についての具体的なお話を聞くことができ、巨大地震や津波に遭遇した時、自分の身に何が起き、どのような問題に直面するのか、どうやって乗り越えていけばよいのか等について、多くの参加者が考えるきっかけとなり、これまで漠然としていたことがイメージできるようになったと思う。今日の講演をふまえ、市としては南海トラフ巨大地震・津波に対し、効果的な対策を具体化し、準備していきたいと思う。